巻 頭 言

**・* 地域をつくる新しい学びの共同体を

藤田 徹(センター事業団理事長/会員)

- 2016沖縄での寄附講座 -

今夏、昨年の沖縄大学に加え、沖縄国際 大学での寄附講座(「ワーカーズコープ論」) が実施された。

昨年同様、協同労働という新しい働き方 について初めて見聞きする多くの学生が新 鮮な驚きをもって受け止めてくれた。

また各大学とも少子化の中、学生の就職 先や就職率が受験者数の増減と大学経営に 直結する現実もあり、就職支援にも相当力 を入れているようだった。

現地で話を伺って驚いたことは、大学によっては入学者の3割近くが中途退学し、残った卒業生の2~3割が就職できずに無業者になり、就職する学生の4~5割が県外の会社に就職しているといった耳を疑うような現実だった。

そこから見えることは、「学ぶこと」や「働くこと」の意味についてもがいている学生の姿であり、何よりも働く場そのものが圧倒的に不足している沖縄の置かれた厳しい雇用の現実だった。

そういった現状を知れば知るほど、米軍

基地削減の運動と同時に本土や外国の大資本による雇用創出ではなく、沖縄県民自身による仕事おこし、まちづくりの大運動が必要なのではないかという想いを強くした。

こういった状況をうけ、ワーカーズコープが母体となってつくった日本社会連帯機構では、来年度現行の沖縄連帯基金を発展させ、沖縄での仕事おこし運動を拡げることを中心テーマとして「沖縄連帯基金一億円運動」(仮称)を沖縄や全国の市民に向け展開していくことを方針化した。

学生ワーカーズコープの設立も含め、社 会連帯と協同労働による仕事おこし・まち づくりへの挑戦が今始まろうとしている。

― 地域を捨てる教育から地域を創る教育へ ―

話は変わるが、先日長野県泰草村にある グリーンウッドというNPO法人を訪問し た。グリーンウッドは山村留学を希望する 都会の子供たちを受け入れ今年で30周年を むかえた団体だ。これまでに600人もの子 どもたちを受け入れてきた。

厳しい自然とともに生きる力、村の歴史

や文化から学ぶくらしの知恵、仲間ととこ とん話し合い相手の想いを理解し協同して いく力などを身につける。

私たちが訪問した日も小学生たちが朝食 を用意してくれたり、寒い冬に備えて集め た薪を使って五右衛門風呂を沸かしたりと いった日常風景が見られた。

彼らが言うには昔の泰阜村の人々は都会 に出ていかないと豊かな生活は送れないと 考え子どもたちに「村を捨てる教育」を一 生懸命すすめていたそうだ。その結果、過 疎化が進み、村も衰退していった。

今、泰阜村はこういった過去の反省に立

一追伸一

この原稿を投稿した数日後、アメリカ大統 領選が実施され、ドナルド・トランプ氏が第 45代アメリカ大統領に選出された。各種世論 調査や大手メディアの予測に反した大番狂 わせの結果に、全世界にトランプショックが 広がっている。トランプ氏が当選した背景に これまで政策を推進してきたエリート層への 反発と不信、格差拡大への不満、大衆迎合 主義(ポピュリズム)などがあると言われてい る。確かにグローバリゼーションや市場開放 を極端に進めてきた結果、市民や労働者の 生活はますます貧しくなり、富裕層はますま す豊かになっていくという現象が生まれ、そ の不満が極限に達した結果だともいえよう。

重要なことはこれがアメリカだけの傾向で はなく日本やヨーロッパなど先進国共通の現 象になり始めているということだ。したがっ て移民や難民の排斥や自国第一主義といっ ち「村をつくる教育」に大きく転換し始め ている。その先導役を30年前から実践して きた団体がグリーンウッドだった。

私はこれらの話とグリーンウッドで暮ら すたくましくも心優しい子どもたちの姿に 触れ、地域をつくる子育てや、地域をつく る学びこそこれからの社会にとって必要に なってくるという確信を深めた。

沖縄の学生の学びが島の再生につなが り、全国の協同労働運動の発展が沖縄と全 国の若者の希望のベースを形作っていく。

年の瀬を前にそんな夢をふくらませてい る。

た内向きの政策が支持され、そういった社 会の分断を声高に叫ぶ極右勢力が台頭しつ つある。

資本主義の終焉が世界の多くの識者から 語られ始めている。植民地や途上国など新 たなフロンティアの減少と喪失による収奪 力の低下、国家を超える規模の多国籍企業 が世界を支配しつつある現状の矛盾と限界 も広がっている。

こういった社会情勢の変化を前に「共に 生きる新しい学びの共同体づくり」という 今回のテーマは、資本主義と自国第一主義 を超える新たな時代の共同体づくりという テーマと深くつながっている。

米大統領選の結果は我々に何を問いかけ ているのか、この機会にまずは一人ひとり が考え、みんなで話し合ってみたらどうだ ろうか。